

京都とねね

豊臣秀吉の妻・「ねね」（「おね」と呼ばれることもある）は、秀吉の死後、何故京都に住むようになったのか？

ねねが秀吉とともに過ごした地で思い出深いところはいくつかあるであろうが、秀吉の行った事業を目の当たりに見て、しかもその跡（あと）が色濃く残っているところといえば、京都である。したがって、ねねは、秀吉の死後、秀吉を偲ぶために京都に住んだのである。その頃、ねねは北政所と呼ばれていたが、北政所は秀吉を偲びながら彼の霊を弔っていたのである。

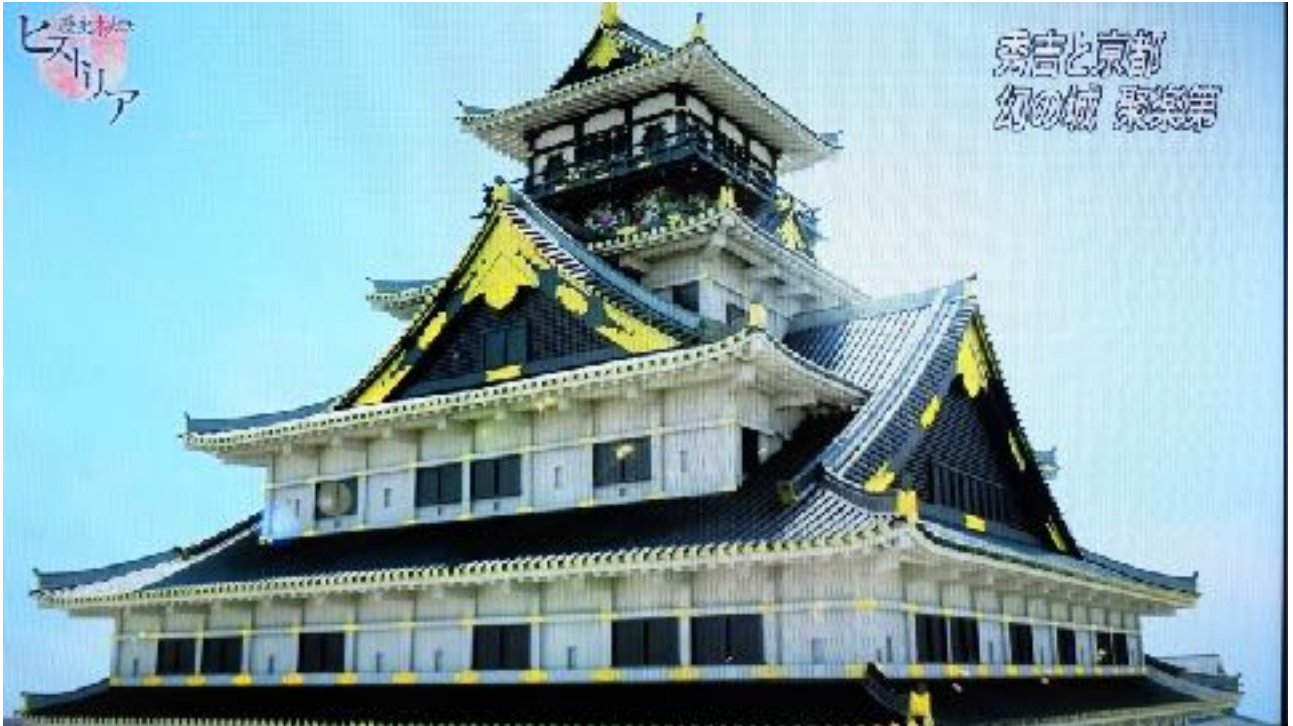
まず最初に、ねねが京都で住んだところ・聚楽第を紹介しておこう。

聚楽第（じゅらくだい）は、豊臣秀吉が「内野（うちの）」（平安京大内裏跡）に建てた政治の場所であり、自らの邸宅でもあった。徳川家康の謁見もここで行われた。

1587年9月、聚楽第に移った秀吉は翌年4月には、室町幕府当時の先例にしたがって、後陽成天皇、親町上皇らを新装なった聚楽第に招く「聚楽行幸」を実現した。それは、権力者としての地位を内外にしめす絶好の機会であった。



聚楽第の全容



聚楽第の中の天守閣

ねねは、この聚楽第の一角に住みながら、秀吉の行った御所の修築、京の町の大改造、京の大仏殿の建立などを目の当たりにして、秀吉という人物の偉大さを再認識したのではなかろうか。ねねにとって、秀吉とともに一緒に暮らしたこの聚楽第の頃が一番幸せであったのではなかろうか。

豊臣秀吉公は、聚楽第とほぼ時を同じくして、応仁の乱から長きに渡る戦乱によって焼き払われ、疲弊した京都市街の大規模な再建を推し進めた。洛中を取り囲む「お土居（どい）」の構築と街区の再編成を命じたのである。

お土居は、東は鴨川、北は鷹峰、西は紙屋川、南は九条に至る延長22.5キロメートル、高さ約4～5メートルの土塁で、外側には幅4メートルから18メートルの堀を伴った。この土塁は、外敵侵入を阻止する軍事的意味合いと同時に、鴨川など河川の氾濫から市街地を守る役割を持っていた。秀吉は、かつての平安京をイメージしながらも、京都の地形並びに治水対策を考えた綿密な計画のもとに都市改造を行ったのである。工事は5カ月で完成し、京都は聚楽第を中心に巨大な城塞都市に変貌した。

お土居の造成に前後して寺院街の建設も行われた。各寺院を強制移転させ、市街地の東側には「寺町」を、北部には「寺之内」を形成したのである。この寺院街の造成もまた、上京に新たな景観を生み出した。また、市街地も四条室町を中心に四分割して、それぞれ

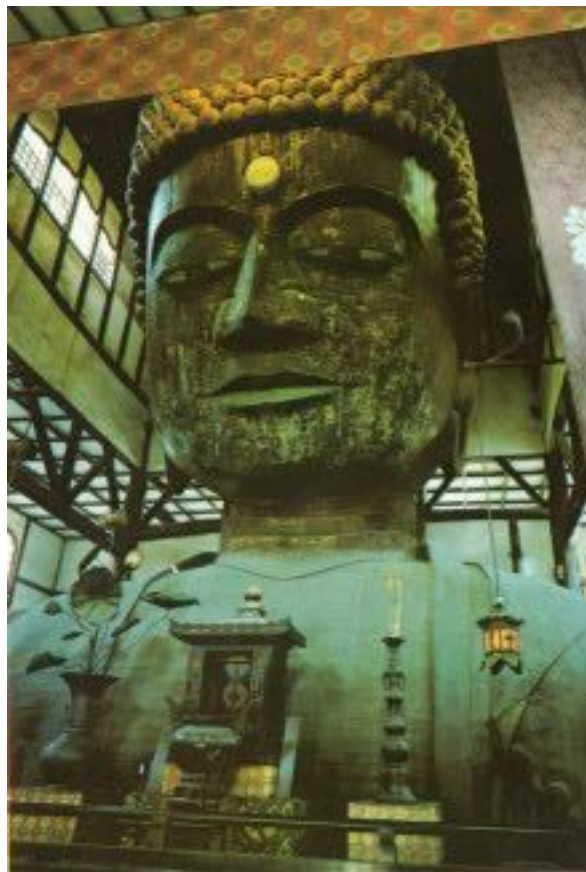
に特徴を持たせ、条坊制に基づく平安京の町（120メートル四方）を短冊形に改め道路幅も縮小，ほぼ現在の道幅に変更した。

現在の京都の街は、秀吉が大改造を行なった当時の面影を色濃く残しているのである。

次に、聚楽第とほぼ時を同じくして建立が始められたのが、方広寺（京の大仏）について述べておきたい。

方広寺（京の大仏）は、残念ながら現在はない。昭和48年の失火によって消滅したのである。方広寺（京の大仏）は、江戸時代には日本三大大仏の一つに数えられたものである。

天正14年（1586年）、豊臣秀吉は天正地震を機に奈良の東大寺に倣（なら）って大仏の建立を計画し、大仏殿と大仏の造営を始めた。文禄4年（1595年）、大仏殿がほぼ完成し、高さ約19メートルの木製金漆塗坐像大仏が安置された。



大仏殿は高さ約49メートル、南北約88メートル、東西約54メートルという壮大なものであり、また境内は、現在の方広寺境内のみならず、豊国神社、京都国立博物館、妙法院、智積院そして三十三間堂をも含む広大なものであった。

大仏殿は、現在、豊国神社が建つ位置にあった。



では、方広寺が秀吉によって建立されてから、昭和8年に焼失するまでの経緯を詳しく見ておこう。次をご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/houkouji.pdf>

豊国神社（とよくにじんじゃ）は、京都市東山区に鎮座する神社。神号「豊国大明神」を下賜された豊臣秀吉を祀る。

亡くなった豊臣秀吉の遺体は火葬されることなく、伏見城内に安置されていたが、死去の翌年、遺命により東山大仏の東方の阿弥陀ヶ峰山頂に埋葬され、その麓に廟所が建立されたのに始まる。

1599年（慶長4年）、朝廷から豊国乃大明神の神号が与えられた。神号下賜宣命には豊国大明神は兵威を異域に振るう武の神と説明されている。遷宮の儀が行われることとなり、「豊国神社」に祀られることとなった。

徳川の時代となり、「豊国神社」は朽ち果てるままに放置されたが、明治になって、天皇のご意向により、現在の地に立派な社殿が建てられた。

暗殺されたわけでもなく、殉死したわけでもなく、普通の死に方をして、神となって京都に祀られている人は秀吉しかいない。また、死んだあとに山に葬られたその遺骨今なおが残り、京都の街を見守っているという例は秀吉しかない。

豊国神社： <http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/toyokunijin.pdf>

では、最後に北政所・ねねが秀吉の思い出にしたり秀吉の霊を弔いながら、日々を過ごした高台寺について説明したい。

ねねは、秀吉没後京都に移ったが、伏見城の化粧御殿をこの地に移築して常住の場所とした。のち北政所に高台院の号が贈られ、徳川家康(1542～1616)の助力により高台寺を創建した。[圓徳院の門の前に立っている石標](#)は北政所化粧御殿の跡を示すものである。

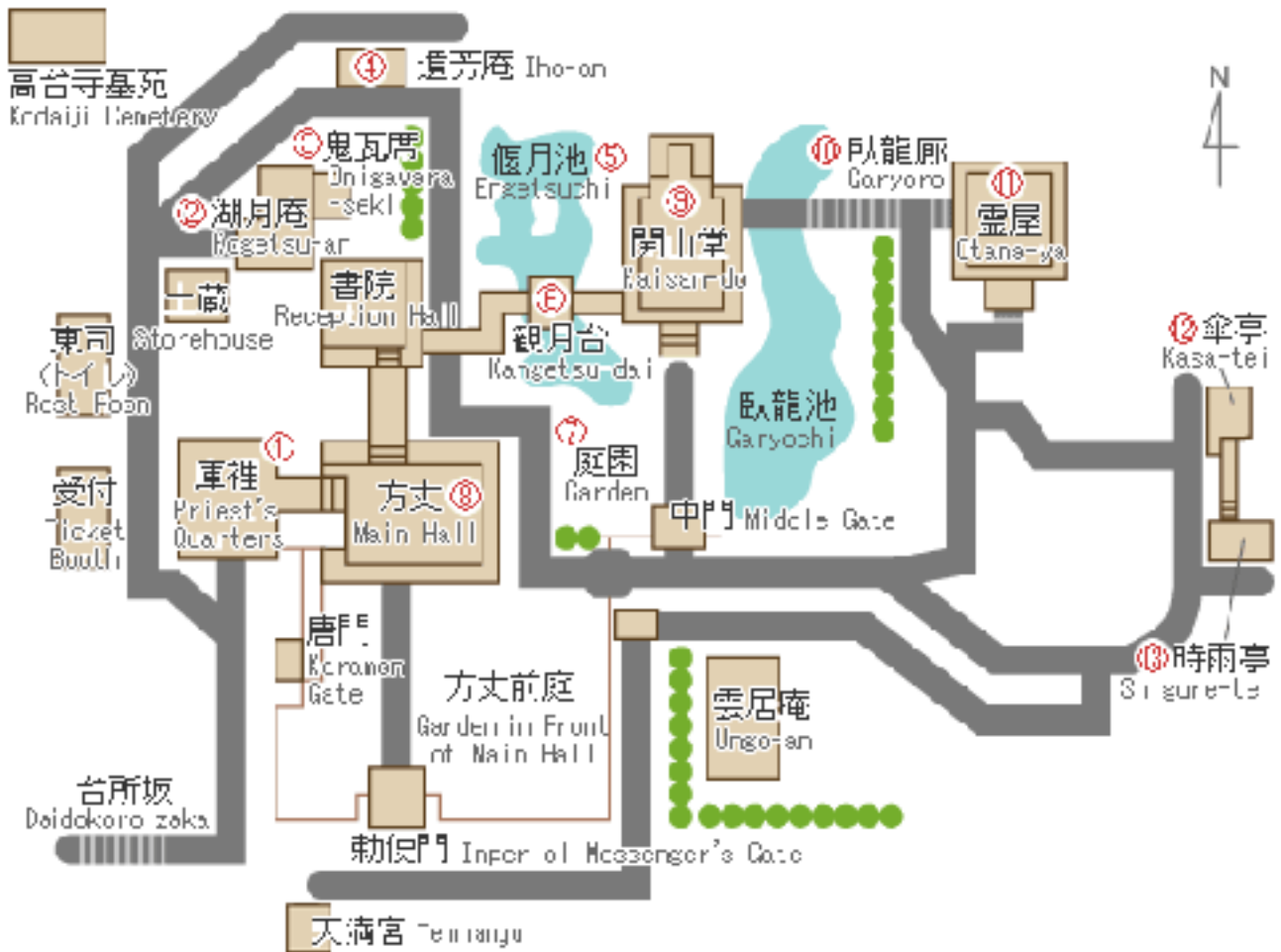
なお、円徳院は高台寺の塔頭である。

圓徳院の位置：<https://www.google.com/maps/place/%E5%9C%93%E5%BE%B3%E9%99%A2/@35.0005691,135.779528,18z/data=!4m5!3m4!1s0x600107edc4995607:0x53685162cf8d9f3f!8m2!3d35.0006043!4d135.7794314>

ねねが圓徳院に住み始めて以来、大名、禅僧、茶人、歌人、画家、陶芸家等多くの文化人が、ねねを慕って訪れたと伝えられています。ねね58歳の時のことです。

上の圓徳院の位置図には台所坂というのが示されているが、高台寺にはその坂を登っていく。その入り口は、圓徳院の前の道「ねねの道」の向かい側にある。台所坂は、ねねが秀吉の霊を弔うために毎日のように通うために使った道だと言われている。

台所坂を登りきったところに高台寺がある。その高台寺には、現在、靈屋（おたまや）と
 いうのがあるが、多分そこに秀吉の石塔か何かがあったのである。北政所ねねはそこで毎
 日のように祈りを捧げたのであろう。



高台寺の境内図

現在の靈屋（おたまや）については、次のホームページとYouTubeをご覧ください。

<http://kyotoshunju.com/?temple=kodaiji>

<https://www.youtube.com/watch?v=qgFyklWTxVI>

北政所ねねは、毎日のように、霊屋で秀吉の霊を弔い、その付近から京都の街を眺めながら、思い出にふけったと言われている。



さて。最後に、「ねねの道」を紹介しておきたい。ねねという個人名のついた散策路というのは珍しい。[圓徳院の前の道が「ねねの道」である。](#)

最近まで、高台寺道として知られていたが、電線地中化工事を終え、広い道幅いっぱい御影石を敷き詰めた石畳の道に整備したことで、京都らしい風情の景色と名が生まれた。

北側の円山公園から祇園閣の角を曲がるとその両側にいくつもの寺院と、洒落た店が建ち並び、圓徳院と高台寺への上り口がある。圓徳院の境内にはショッピングを楽しめる京・洛市「ねね」がある。



ねねの道

(<http://www.imamiya.jp/haruhanakyoko/kyototravel/nene.htm> による)